

# 鎌倉時代の片仮名交り注釈書

柳田 征 司

- 一、はじめに
- 二、旧仏教の片仮名交り注釈書
- 三、新仏教の片仮名交り注釈書
- 四、おわりに

一、はじめに  
筆者は、先に、院政期までの、さまざまなる形態にわたる注釈活動を概観し、(1)注釈書(音義・書入れ注を含む)の作成が、国書(俗書・仏書・和歌)と中国書の仏典において盛んで、漢籍においてはあまり行われなかったらしいこと、(2)それを作成した人から見ると、進歩的な仏教が独自の注釈書を早く作っていることを見た。そして、そのような背景のもとに、口頭語を露呈した片仮名交り体の講義聞書注釈書、中山法華経寺本『三教指帰注』が早く成立し

得たものと考えた。<sup>(注1)</sup>

また、これにみきつづいて目を鎌倉時代にうつし、華嚴宗の明恵(一一七三—一二三二)の講義とその聞書『納涼坊談義記』、『花嚴信種義聞集記』、『解脱門義聽集記』、『光言句義釈聽集記』、『梅尾御物語』について調査・考察し、それらが、細部においては相違があつても、後の抄物に極めて近いものであることを確認した。<sup>(注2)</sup>

本稿は、右の考察をうけて、明恵以外の、鎌倉時代における注釈活動を展望しようとする。ただ、既に、先に、さまざまの形態(音義・書入れ漢文注・書入れ仮名注・漢文注・仮名注)にわたる注釈活動の中で、口頭語を露呈する仮名交り注釈書の成立までを見たので、ここでは、対象を仮名交り体の注釈書に限定することにする。また、抄物へのつながり

ということから、圖書の和歌・物語の注釈書はこれを対象外とする。

さて、そのように対象を限定しても、鎌倉時代に作成された仮名交り体の注釈書で今日に伝存するものは、相当の量にのぼるにちがいない。それらの資料を発掘し、整備することは、設定しているテーマにとつて重要なことである。しかしながら、そのことは短い期間にはなし得ないことであるから、今はとりあえず、伝存の知られているもの、しかも筆者の気づいた範囲のものについて、これを概観し、後の研究にそなえたいと思う。しかし、管見の範囲で概観することによって、いくらかの知見は得られるものと思われる。

鎌倉時代の注釈活動は、これを作成した人たちの属していた宗派によつて、これを次のように分けて概観するのがよいように思われる。<sup>(注3)</sup> なお、金沢称名寺は、古く念仏宗を奉じ、弘長二年(一一六三)西大寺叡尊の化を受け直言律宗に改め、文永五年(一一八八)初代長老審海の来住によつて直言宗を奉じるようになったとされるが、<sup>(注4)</sup> 学向の府として発展したので、別に一項を立てることとした。

旧仏教……(一)華嚴宗、(二)天台宗、(三)直言宗、

(四)金沢称名寺  
新仏教……(五)浄土宗、(六)浄土真宗、(七)日蓮宗、

(八)禪宗

## 二、旧仏教の片仮名交り注釈書

### (一)華嚴宗

鎌倉時代成立の華嚴宗の仮名交り注釈書としては、高山寺の明恵のものが知られている。また、明恵の説を受けた、その弟子喜海・高信の説を集めたものに『起信論本疏聽集記』、『起信論別記聽集記』(ともに『大日本仏教全書』所収)がある。また、明恵の弟子乃至はそれにつながる人物の注釈かと思われる題未詳仏書注釈書もある。<sup>(注5)</sup> 明恵のものには、その講義を聞書したものがあって、口頭語を交える点で注目される。

明恵関係以外の華嚴宗関係の仮名交り体注釈書としては、次の書が管見に入った。

『華嚴五教章聽抄』(『大日本仏教全書』所収) 巻首に「建武元年卯月十七日於泉州久米田寺抄之」とある。盛誉(一一七三—一三六二)の講義を聞いて、<sup>(注6)</sup> 聖憲(一一三〇—一三九二)が抄したものである。

(二)天台宗

天台宗西山流の澄空（一七七一—一四七）撰の『  
観門義草案』二巻が管見に入った。  
(三) 真言宗

前稿で扱った中山法華経寺本『三教指帰注』は、  
日蓮手沢本と伝えられており、鎌倉時代後期から同  
寺に存したと見られているが、講義と南書は恐らく  
真言宗の僧によるものであろう。くだって、鎌倉時  
代成立の仮名交り体の注釈書としては、次下のもの  
が管見に入った。

『三教指帰（注）』三巻 文安二年（一四四五）写  
三冊 慶応義塾大学図書館蔵、文祿三年（一五九

四）写 高野山正智院蔵

運保六年（一一一八）から承久二年（一一二〇）に  
わたって、敦光注に或人の説を加えて作成されたも  
の。注者未詳。慶応大学本が東洋で書写され、そこ  
に伝わった本であるところから見ても、真言宗の  
ものと見てよいのではない。

『性靈集略注』一〇巻 嘉元四年（一一三〇）写  
二帖 慶応義塾大学図書館蔵

貞応二年（一一二二）に高野山八傑の一人真弁撰、  
片仮名交り文を含む。

『新樂府注』二巻 正嘉元年（一一二五）写 一

帖 直福弁蔵

この書は白氏文集『新樂府』の講義南書で、正嘉元  
年に鎌倉佐々目谷で書かれたものである。太田次男  
博士は、佐々目谷を醍醐寺三宝院系の遺身院と推定  
されている。

以上の三点のうち『新樂府注』は講義の南書と見  
られてゐる。太田博士は、『新樂府注』が、敬意を  
表する講義体の「候」を多く用いていること、耳か  
ら受容れた言葉を後に訂正した跡をとつことなどを  
指摘している。しかし、博士は、これを單純に講義  
の南書とは見ておられないよりであって、『新樂府  
注』が、先行する漢文注、醍醐寺蔵『新樂府略意』  
の影響下にあることを推定し、「正嘉本は略意の各  
題毎の大意を述べる箇所を参考にして、これを更に  
敷衍して、平易な講義調に改めたものではないか」と  
する。南書を基盤に後に補訂整備されたものと思  
ておられるのであろうか。『新樂府注』は、片仮名  
の宣命体を含み、完全な仮名交り体ではないけれど  
も、そこに口頭語の露呈をいくらか認めることが出  
来ることで注目される。

(四) 金沢称名寺

金沢称名寺関係の片仮名交り注釈書で管見に入っ

たゞのは今のところ次の通りである。<sup>(注12)</sup>

『日本紀私抄』 一冊 大倉精神文化研究所蔵  
写本(原本、東京萩野瑞氏蔵)<sup>(注13)</sup>

称名寺第三代剣河(一二六一—一三三八)の日本書紀雜記であるが、広い意味で注釈書に加えてよいのではないかと考えられる。

『正法眼蔵打聞』 鎌倉末期写 殘簡六葉 金沢文庫蔵

称名寺第三代湛睿(一二七一—一三四六)の研究手控<sup>(注14)</sup>かといひ。

『孝經正宗分南書』 鎌倉末南北期初写 一冊 金沢文庫蔵

阿部隆一博士はこの書が、鎌倉末か南北期初に称名寺において行われた孝經講義の南書であることを推定された。<sup>(注15)</sup>しかし、また比較的整備されていること、四声清濁の圈点を詳細に付していることから、講師自筆の筆録またはその手が入ったものと見ておられる。<sup>(注16)</sup>

### 三、新仏教の片仮名交り注釈書

#### (五) 浄土宗

浄土宗関係の片仮名交りの注釈書については、い

まだ調査を進め得ていないが、次の書はそれかと思われる。

『無量壽經論南書』 上巻のみ 一冊 金沢文庫蔵<sup>(注17)</sup>  
建長八年(一二五六)良聖書伝。問答体で書かれて

いる。ただし、殆ど擬漢文体であって、仮名交り体のところは極めて少い。

#### (六) 浄土真宗

親鸞(一一七三—一二六二)に、『唯心鈔文意』  
(一二五〇年)、『尊号真像銘文』(一二五五年)、『  
一念多念文意』(一二五七年)があるが、いずれも  
直接述作されたもので、講義の南書ではない。<sup>(注18)</sup>

#### (七) 日蓮宗

日蓮(一二二二—一二八二)に、『法華經』本文  
への自筆書入れ注、『注法華經』がある。また、『日蓮  
が弘安元年(一二七八)から三年にわたって、『法  
華經』を講じたところを弟子が筆録したものに、『日  
興の『御義口伝』と、『日向の『御講南書』がある。<sup>(注19)</sup>

#### (八) 禅宗

鎌倉時代成立の仮名交り体の注釈書としては次の  
書が知られている。

『正法眼蔵抄』 『梵網經略抄』 三一冊 泉福寺  
蔵

この書の成立については、複雑な問題があつて、いまだ定説を得ていないよりである。<sup>(注20)</sup>『正法眼蔵抄』は、一説に、道元の語ったところを弟子詮慧が記した南書に、更にその弟子の經象が自説を加えたものといひ、また、一説に、弘長三年（一二六三）頃詮慧が講じたところを法弟寂光や弟子經象が南書したものに、乾元二年（一三〇三）から延慶元年（一三〇八）にわたつて、經象が自説を加えたものといひ。また、『梵網經略抄』は延慶二年に經象が詮慧の説を集めたものといひ。

#### 四、おわりに

以上、管見に入つた範囲の乏しい資料に過ぎないけれども、これを概観して気づくことは、各宗派において最も重要な位置を占める書物が注釈の對象とされていくという傾向が認められるといふことである。<sup>(注21)</sup>これをどうして見れば、右にあげたところは、確かに乏しいものであるけれども、ある宗派については主要なものをかぎりあげていることになるのかも知れないと思われぬ。これら、鎌倉時代成立の、片仮名交り体の講義南書を見えきたところについて、われわれは次の点を注目したい。

一つは、伝存する片仮名交り体の講義南書が、僧の手になるものであつて、博士家のものが知られていないといふことである。これは、資料伝存の偶然といふこともあり得るけれども、やはり、博士家において、講義活動は盛んであつて、本文と注疏の訓読が中心で、いまだ片仮名交りの南書を作成してはいなかつたといふ可能性の方が大きいのではないかと思われぬ。院政期以前の場合から見ても、そのように推定してよいかと思われぬ。

二つは、片仮名交り体の講義南書が、旧仏教、新仏教を問わず、各宗派で作成されているらしいことである。これらの口頭語を交えた講義南書が、どのような形で室町時代の禅僧による抄物につながっているのかを具体的にとらえることは、残念ながら、今のところ出来ない。しかしながら、広く仏家にとつてのよきな活動とその成果があつたといふことは、抄物の成立を考える上で見落してはならないことと思われぬ。従来、口語体の抄物を禅宗という宗派と強く結びつけて、例えば、中国禅僧の俗語体の語録の影響を考へることなどが行われてきたが、そのよきな見方とともに、一方で、仏家全体の動きを見なくてはならないと考へる。そのよりに考へると、

従来研究が手薄であるところの、室町時代における禅宗以外の宗派の講義厨書の調査研究が今後の重要な課題になると思われる。

(注1) 築島裕・小林芳規編『中山法華三教指帰注 経蔵本 総索引及び研究』(近刊)所収拙稿。

(注2) 第二回鎌倉時代語研究会(一九七七・八)において口頭発表。

(注3) このほかの宗派にも少くないものと思われる。例えば、『日本思想大系』所収の片仮名交り体の『法相二巻抄』は、注釈に近い性格をとり、法相宗にも片仮名交り体の注釈書が伝存するかとと思われる。

(注4) 結城陸郎『金沢文庫と足利学校』(至文堂一九六六・一一)

(注5) 拙稿「高山寺藏鎌倉時代後期書写題未詳仏書注釈書」(鎌倉時代語研究1 一九七八・三)にその本文を翻刻した。

(注6) 『大日本仏教全書』(講談社 一九七三) 解題1による。

(注7) 『大日本仏教全書』所収。なお、尾上寛仲「中古天台に於ける談義所」(印度學仏教学研究 8・1 一九六〇・一)同「關東における中古天

台——金沢文庫の資料を中心とする檀那流について——」(上)(下)(金沢文庫研究一〇〇・一九六四・四・一〇一 同・五)「關東の天台宗談義所——仙波談義所を中心として——」(金沢文庫研究一六七 一九七〇・三・一六八 同・四・一六九 同・五)などによると、各地に談義所があつて、談義が盛んに行われたよりであるが、それらの厨書については調査することが出来ていない。少くとも、叡山文庫の蔵書中に該当する仮名交り体の注釈書が伝存し、それがどの程度の調査を必要とする。

(注8) 小林芳規「中山法華寺本三教指帰注の文章と用語」(国文学攷 72・73合併 一九七六・一二)による。

(注9) 注1拙稿。

(注10) 筆者未見。阿部隆一「新に見出されたる鎌倉鈔本真并撰「性靈集略注」」(慶応義塾大学図書館月報9 一九五五・八)参照。

(注11) 太田次男「真福寺藏新樂府注と鎌倉時代の文集受容について——付・新樂府注齣印——」(斯道文庫論集7 一九六九・一〇)。なお、この書については、小松茂美『平安朝伝来の白氏文集

と三蹟の研究』(墨水書房 一九六五・一〇)川

口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』(明治書院

一九五九・九 一九六一・三)小林芳規『中世

片仮名文の国語史的研究』(広島大学文学部紀要

特輯号3 一九七一・三)来田隆『国語史料とし

ての真福寺藏新樂府注正嘉元年書写本』(鎌倉時

代語研究1 一九七八・三)来田隆・福岡教育大

学国語史研究会『直福寺藏新樂府注総索引(一)――

本文篇・自立語索引篇――』(同前2 一九七九

三)参照。

(注12)金沢文庫には多くの仮名交り注釈書が伝存

するのではないかと思われるが、その蔵書の調査

が不本意ながら至らなかつたことを遺憾とする。

なお、結城陸郎『金沢文庫の教育史的研究』(吉

川弘文館 一九六一・三)参照。

(注13)新装茶色縦縞表紙(縦三一・三煙×横三三

〇煙、原本は縦二四・二煙×横一五・五煙か)。

外題「日本紀私抄」。巻尾遊紙に「東京市本郷区

東片町三一 荻野瑞氏所蔵/昭和十年十二月影写

了」。全二〇丁。西田長男『西部神道家の日本紀

研究』(国学院雑誌 一九三八・四)、中村光『

中世に於ける日本書紀の研究』(『本邦史学史論

叢』上 富山房 一九三九・五)、『古文書古記

録影写副本解題』(大倉精神文化研究所 一九四

三・七)参照。なお、西田論文によると、尊経閣

文庫蔵の『潤背』なる書(近藤疵城編『改史籍集

覧』第29冊(近藤活版所 一九〇二・一二)所収)

は、この『日本紀私抄』に続く後半に当るとのこ

いり。

(注14)筆者未見。納富常天『金沢文庫資料紹介・

正法眼蔵打聞』(金沢文庫研究3 一九五五・七)

岡靖『金沢文庫書誌論考』(金沢文庫研究紀要2

一九六四・一一)による。

(注15)阿部隆一『金沢文庫蔵 孝経正宗分廟書考』

(金沢文庫研究9・10・11 一九六三・一一)。

なお、この書については、亀井孝ほか編『日本語

の歴史』4(平凡社 一九六四・七)参照。

(注16)阿部隆一『金沢文庫の漢籍』(金沢文庫

一九七二・五)は、「聞書或は講師の講義手控の

原本」ともする。

(注17)筆者未見。金沢文庫蔵の紙焼き写真による。

外題「墨鸞注聞書上」。次の興書あり。

建長八年丙三月十九日西時書了/於下総国匝路

庄末倉郷/書伝之了筆師時年廿三才/良聖(花

(注18) 金子彰「ココロエヤスカラムトテシルセルナリ」『唯信抄文意』における注釈の方法I、II(一九七七)八、一二鎌倉時代語研究会口頭発表ならびに発表資料)あり。『大正新修大藏経』所収の本文によった。なお、金子氏の御教示によると、親鸞には仮名交り注の書入れが多く伝存するといふ。

(注19) 『大正新修大藏経』所収の本文によった。

(注20) 『正法眼藏抄』、『梵網経略抄』については、次の論文を参照。

椎木俊雄 正法眼藏抄の研究 禅学雜誌 一九一

八・一一、一二、一九一九・二、三、四

鏡島元隆 正法眼藏抄の成立とその性格 驹沢大

学仏教学部研究紀要22 一九六四・三

峯岸孝哉 『正法眼藏抄』について——特にその

成立に關する問題点について—— 宗学研究6

一九六四・四

黒丸寛之 懺悔と戒行について——『梵網経略抄』

研究序説—— 同前

東隆真 「正法眼藏抄」の成立に關する一考察——

一 宗学思想史研究序説・その三—— 宗学研究

東隆真 正法眼藏随庵記と正法眼藏抄(一)——

宗学思想史研究序説 其の五—— 驹沢女子短

期大学研究紀要1 一九六六・一〇

東隆真 正法眼藏随庵記と正法眼藏抄(1)——

宗学思想史研究序説 其の四—— 印度学仏教

学研究15(1) 一九六六・一二

菊地良一 『正法眼藏抄』「諸悪莫作」の帖につ

いて 宗学研究10 一九六八・三

永久岳水 正法眼藏影室抄の研究 宗学研究11

一九六九・三

永久岳水 宗学研究資料——模写正法眼藏鈔来由

—— 宗学研究11 一九六九・三

東隆真 正法眼藏随庵記と正法眼藏抄 驹沢女子

短期大学研究紀要3 一九六九・一〇

東隆真 道元禪師の門下と鎌倉 金沢文庫研究15

11 一九六九・一一

酒井得元 公解説∨注解一 曹洞宗全書10巻会報

4 一九七〇・一一

酒井得元 公解説∨注解二 曹洞宗全書11巻会報

5 一九七一・一

池田魯参 正法眼藏抄の問題 驹沢大学仏教学部



論叢1 一九七二・三

池田魯参 『梵網經略抄の尙題——梵網戒經の研究』

史からみた——宗学研究14 一九七二・三

東隆真 『正法眼藏抄』(注解一・二)について

曹洞宗全書4卷会報10 一九七二・三

菊地良一 『正法眼藏抄の成立について——基礎

的な内部考察を中心に——群馬女子短期大学紀

要1 一九七二・一

倉石義範 『正法眼藏抄』の伝来に関する尙題点

印度学仏教学研究22・1 一九七三・一二

永久岳水 『正法眼藏』物語——『正法眼藏古鈔』

について——(一)(二)(三) 永平正法眼

藏叢書大成月報1 一九七四・四、2 同・七、

3 同九

永久岳水 『正法眼藏』物語——『正法眼藏古鈔』

の付録について——(四)(五) 同前月報7

一九七六・一、8 同・八

大久保道舟 詮慧・経豪の系譜 同前月報2 一

九七四・七

鏡島元隆 泉福寺と『御抄』 同前月報5 一九

七五・二、6 同・七、7 一九七六・一

中山成二 『梵網經略抄』考 宗学研究17 一九

七五・三

倉石義範 『正法眼藏抄』諸悪莫作の巻にみられ

る「私云」と「私」について 駒沢大学大学院

仏教学研究会報9 一九七五・三

鏡島元隆 正法眼藏抄をめぐる諸尙題 岡本素光

博士喜寿記念会編『禅思想とその背景』 春秋

社 一九七五・七

嶺光雄 正法眼藏抄仙性の巻における談義文と南

書文の性格と關係 宗学研究18 一九七六・三

河村孝道 泉福寺本『正法眼藏聴書抄』に就いて

——経豪真蹟本の真偽を述べて—— 永平正法

眼藏叢書大成 注解研究篇14 大修館 一九七

六・八

小坂機融・河村孝道 『御抄』附録解題 同前

鏡島元隆・河村孝道・桜井秀雄・椎名宏雄・高橋

全隆・永久俊雄・松田文雄 曹洞宗全書の刊行

をとおして(上) 曹洞宗全書別巻4会報22 一九七

七・九

(注21) 川林芳規博士の御教示による。今後この種  
の資料を探す場合にこの点を考慮すべきことと  
教示された。

(注22) 和島芳男『中世の儒学』(吉川弘文館 一

九六五・三) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の  
國語史的研究』(東京大学出版会 一九六七・三)  
(注23) 小川環樹『清原宣賢の毛詩抄について』(文  
化10・11 一九四三・一一)

「付記」本稿は、第四回鎌倉時代語研究会(一九七  
九・八)において発表したところをまとめたもの  
である。小林芳規博士はじめ会員の方々の御指導  
をいただいた。記して謝意を表する。